



イベントレポート

# East Asia Hemophilia Forum (EAHF)2015に参加して

野上恵嗣 奈良県立医科大学小児科准教授

## はじめに

2015年11月13～15日に奈良の東大寺総合文化センターで第6回 East Asia Hemophilia Forum(EAHF)2015が開催されました。このフォーラムは、東アジアの各国(中国、韓国、台湾、日本)の血友病医療をお互い共有することにより、その発展を図る目的で開催され、今回で第6回になります。日本血栓止血学会血友病部会の先生方のご協力のもと、本フォーラムは奈良県立医科大学小児科の嶋 緑倫教授をchairmanとして行われました。私は secretary generalを担当しており、参加者というよりはむしろこのフォーラムを運営していく側でありました。

今回から従来の4カ国に、さらにオーストラリアとニュージーランドも加わり、東アジアからパンパシフィックフォーラムという形になっています。今回の参加者は全部で216名と非常にたくさんの方が参加されました。なかには、モンゴル、インド、ベトナムからも参加があり、フォーラムは大変にぎわいました。そして、各国の血友病医療の現在の状況もよく理解することができ、討論もきわめて活発に行われていました。

## 講演について

今回、Keynote Lectureとして現在WFH(World Federation of Hemophilia)の副会長であるChristian Medical College(インド)のDr. Alok Srivastavaから“Preventing joint bleeds in hemophilia”の講演がありました。血友病患者の慢性的合併症の最も大きな課題は血友病性関節症です。その進展機序や因子などの詳細な解説、そしてこの関節症の進展を防ぐにはやはり、関節症進展のリスクを加味して、患者個々の関節状況に応じた適切な製剤投与が重要であることを述べられました。

また、Educational SeminarとしてPeking Union Medical College Hospital(中国)の整形外科医のDr. Jiliang Zhaiから“Classification of haemophilic pseudotumor and outcomes of surgical treatment”の講演がありました。最近あまりみなくなった血友病性偽腫瘍について、経験された38症例からその臨床的分類や治療について詳細に解析され、その経験の見地から、製剤補充により安全に手術が施行できることを述べられました。しかし、感染リスクや再発も危惧しなければならぬとのことでした。